

アカデミック・ライティングに向けて
ービブリオバトル導入の試みー

伊 藤 恵美子

愛知東邦大学

アカデミック・ライティングに向けて ービブリオバトル導入の試みー

伊 藤 恵美子*

目次

1. はじめに
2. ビブリオバトル
 - 2.1 ビブリオバトルとは
 - 2.2 ビブリオバトルの教育現場での可能性
3. 演習授業
 - 3.1 これまでの演習の問題点から解決策へ
 - 3.2 専門演習で目指したこと
 - 3.3 ビブリオバトルの状況
4. 調査
 - 4.1 調査概要
 - 4.2 結果と考察
5. ビブリオバトルから今後の課題へ

1. はじめに

かつての大学では演習科目は3年生と4年生に対して開講されるのが一般的であったが、本学では現在、1年次の導入科目として「基礎演習」、2年次対象に「総合演習」、3・4年次に「専門演習」が必修科目として開講されている。つまり、学生は入学時から卒業時まで、どこかの演習に必ず属さなければならず、これは勉学意欲が高い学生にとっては演習担当教員のアドバイスが得やすい非常に良いシステムである。ところが、目的意識が希薄で友人や家族等の周りの雰囲気に合わせて何となく進学した、所謂モラトリアムの学生には、毎週の演習は窮屈に感じられ、あまり芳しく思われていないようである。また、勉学意識が高くなくても親しい友人と同じ演習に配属された学生は教室で友人に会えるということも手伝って出席率は低くないようであるが、人数制限のため仲間がいない演習に配属になった学生や⁽¹⁾、そもそも学内に親しい友人がいない学生は演習活動に消極的で休みがちになってしまう傾向がある。

そこで、筆者は4年次の卒業研究に学生が主体的に取り組む前段階として⁽²⁾、学生一人ひとりの自主性を尊重しながら、それぞれの学生の関心を引き出す方法はないか、同じ学科の顔見知り

* 愛知東邦大学経営学部

程度から演習の仲間として相互交流が促される仕組みはないかを考え、3年次の「専門演習」にビブリオバトルを採用することにした。

2. ビブリオバトル

2.1 ビブリオバトルとは

ビブリオバトルは「本の紹介を中心にしたコミュニケーションゲーム」であり、「ビブリオは書籍を表すラテン語由来の接頭辞であり、バトルは戦いを意味する」（谷口，2013：15）。谷口忠大が京都大学大学院情報学研究所システム科学専攻共生システム論研究室の研究者として在籍していた2007年にゼミの中で新しい形の勉強会を主催して、その発表ルールを作り（吉野，2013：21）、今日のビブリオバトルに至っている。

ビブリオバトルの公式ルールは、次の4つである（ビブリオバトル普及委員会，2015：6-7）。

- (1) 発表参加者が、読んで面白いと思った本を持って集まる。
 - (2) 順番に、1人5分間で本を紹介する。
 - (3) それぞれの発表の後に、参加者全員で、その発表に関するディスカッションを2～3分おこなう。
 - (4) すべての発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を、参加者全員1票でおこない、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。
- ルールに関する補足事項も公開されている（ビブリオバトル普及委員会，2015：8-9）。
- (a) 紹介するお気に入りの本は、必ず自分で読んで選んだ1冊にする。
 - (b) 発表順は公平に、ジャンケンやくじなどで決める。
 - (c) 原稿やレジュメなどは用意せず（メモ程度ならOK）、できるだけ、ライブ感をもって発表する。
 - (d) 5分を超えての発表や、途中で終了してしまうのはルール違反。参加者（聴衆）からも見えるようにパソコンのカウントダウンタイマーなどをつかい、終了時にはベルなどで合図をする。
 - (e) 発表やディスカッションタイムがスムーズにいくように、司会役を決めておくとよい。
 - (f) ディスカッションタイムでは、質問する人は発表者をからかうような質問や批判、自分自身の意見表明をしない。また、コンパクトに質問する。
 - (g) 質問が多い場合にはディスカッションタイムを多少延長しても構わないが、当初の制限時間を大幅に超えないように運営する。
 - (h) 発表がよかったか・・・ではなく、発表を聴いてどの本が読みたくなかったかで投票する。
 - (i) 紳士協定として、発表者は自分以外の人が紹介した本に投票する。
 - (j) チャンプ本は参加者全員の投票で民主的に決定され、一部少数の教員や司会者、審査員などによって決定されてはならない。

2.2 ビブリオバトルの教育現場での可能性

大学の研究室から始まったビブリオバトルは公共図書館や書店等の町中だけでなく、小学校・中学校・高等学校等の教育現場にも広がりを見せつつある。大学教育の正課としては、2011年度に大阪大学で基礎セミナーの授業に初めてビブリオバトルが正式に取り込まれ、読む本のジャンルを広げること、面白い本を見つける力・プレゼンテーション能力・質問する力を身につけることを到達目標として実施された（谷口，2013：191-192）。皇學館大学では学内の国文学会や研究室や1年生向けの授業で（岡野，2013）、佐賀大学では1年生向けの必修科目の授業で（中山，2013）、室蘭工業大学では留学生向けの日本語の授業で（山路，2013）、ビブリオバトルが採り入れられている。

では、なぜビブリオバトルは単なる読書好きのゲームにとどまらず、初等教育から高等教育に至るまで多様な教育の現場で正式の授業に採り入れられているのであろうか。

公式ルールと補足事項から分かるように、理由の第一は、ビブリオバトルは自由度が高い書評ゲームだからである。紹介する本は紹介者が面白いと思うという点が最大のポイントで、分野は限定されず小説でも漫画でも写真集でも構わない。ビブリオバトルは勉強会の一形態として誕生した経緯があるが、演習授業の一般的な輪読のように教員が専門書や論文を指定するということはしない。

第二は、参加者のプレゼンテーションが終わったら、主催者や教員等の権威者ではなく参加者の多数決によりチャンプ本を選ぶので、運営が公平で民主的だからである。多数決の対象が紹介した人ではなく紹介された本という点も重要で、チャンプ本に選ばれるか否かは参加するメンバーの背景や関心により変わる。したがって、チャンプ本に選ばれるためにはメンバーの志向に応じて紹介する本を選定するという観点も伴う。

第三は、チャンプ本に選ばれるためにはパワーポイント等の視覚情報に頼らず伝えたいことを自分の言葉で生き生きと語らなければならないので、聴衆に訴える力、プレゼンテーション能力が必然的に向上するからである。

第四は、聴衆は紹介者に質問をしてからチャンプ本を選ぶ1票を投じなければならないので、その場に座っているだけの受動的な態度ではなく、傾聴するという能動的な態度が養われるからである。

第五は、紹介する人を通して聴衆は新しい本に出会い、紹介された本を通して聴衆は紹介者の内面（精神性・関心）を知ることができるからである。これは発案者によれば「ビブリオバトルが『人を通して本を知る』だけでなく『本を通して人を知る』場であるということこそ、真の魅力がある。そして、それが本質なのである」と表現され（谷口，2013：152）、「言葉による情報のやりとりは、意味の定まったものを間違いなく伝える行為というよりも、何か新しい意味を創造している側面が実に強い。・・・本を語ることは、実はそのまま、自分自身を紹介していることになるわけだ」と説明される（谷口，2013：154-155）。紹介者が語る解釈や意味づけが気になる、紹介者の考えをもっと知りたい、紹介者と話したいと聞き手が思うようになれば、両者の

関係は同じ学科の顔見知りから友人への扉を開くだろう。

3. 演習授業

3.1 これまでの演習の問題点から解決策へ

大学図書館ツアーは一般的にどの大学でも新入生向けに行われており、本学1年次の「基礎演習Ⅰ」にも組み込まれているので、高校時代に本と無縁だった新入生も図書館（ラーニングコモンズ棟、以下L棟と略す）の利用法を理解し、その後の「基礎演習」で本を使って勉強しているはずである⁽³⁾。ところが、2015年度「総合演習Ⅰ」で資料を探すという課題を出したところ、「(小・中・高校時代を含めて)初めて図書館で本を借りる」と戸惑いを見せた学生がいた。

この不可解とも言える状況に現実的に対応するため、2016年度「専門演習Ⅰ」においても学生とともに図書館に足を運ぶことにした。学内で図書館（L棟）の基本的な利用を体験してから、資料の豊富な公共図書館（愛知県図書館・名古屋市鶴舞図書館）へ出かけ、興味が持て既存の知識で読めそうな本を1冊選んで借りるという段階から、演習授業をスタートすることにしたのである⁽⁴⁾。これは一見では遠回りの無駄な作業のように思われるかもしれないが、4年次の卒業研究で学内外の図書館資料の活用が必至なることを考慮に入れて専門演習を包括的にデザインするならば、できる限り早い段階で身につけさせておくべき初歩的なスキルである⁽⁵⁾。

3.2 専門演習で目指したこと

2016年度前期に「専門演習Ⅰ」で実施した内容について、授業の目的、及び到達目標等とともに『SYLLABUS 2016 経営学部地域ビジネス学科』の形式で示す。

【授業の目的と概要】

卒業論文を執筆する専門演習Ⅲ・Ⅳの前段階として、この授業では「本を読む」ことを楽しみながら親しみます。演習授業では課題図書が一般的ですが、この授業ではビブリオバトルという形態により、ゼミ生とゼミ生、ゼミ生と知識をつなげます。

【各回の内容】

第1回	オリエンテーション	授業の進め方・成績評価について説明、自己紹介、個人面談
第2回	本の選択1	本学L棟で本の選択
第3回	ビブリオバトル1-1	Aグループのプレゼンテーション
第4回	ビブリオバトル1-2	Bグループのプレゼンテーション
第5回	ビブリオバトル1-3	Cグループのプレゼンテーション
第6回	本の選択2	愛知県図書館で本の選択
第7回	ビブリオバトル2-1	Aグループのプレゼンテーション

第8回	ビブリオバトル2-2	Bグループのプレゼンテーション
第9回	ビブリオバトル2-3	Cグループのプレゼンテーション
第10回	本の選択3	名古屋市鶴舞図書館で本の選択
第11回	ビブリオバトル3-1	Aグループのプレゼンテーション
第12回	ビブリオバトル3-2	Bグループのプレゼンテーション
第13回	学外学習	古川美術館で事業家・古川爲三郎氏の足跡を学び、公開されている美術品を鑑賞する
第14回	レポート提出	レポートの提出→返却→修正
第15回	まとめ	前期学修の振り返り

【授業の到達目標】

良い本に出会って知識が獲得できるようになる。

聴衆が理解・共感するプレゼンテーションができるようになる。

プレゼンテーションを傾聴できるようになる。

【事前・事後学習】

図書館で良い本を探して、プレゼンテーションの準備を行うこと。

【成績評価基準】

プレゼンターとして、本の紹介を通して効果的なプレゼンテーションができるか。

聴衆として、発表を傾聴する責任と姿勢に関心が払えるか。

前述のように、各学生が3館（本学のL棟・愛知県図書館・名古屋市鶴舞図書館）で選んだ1冊の本を自宅で読んできて教室で内容を紹介するというガイドラインに沿って、半期に3回ビブリオバトルを行った。

期末の課題として、読んだ本3冊について奥付の書誌情報を確認して発表した内容をレポートにまとめさせた。このまとめは、自分自身で文字を追って読んだこと、言い換えれば著者の主張を自分の脳を介して解釈したことを踏まえ、口頭で発表した内容を文字化することなので、インターネット上の他人の文章をコピーする必要はない。頭に浮かんだことを自分の言葉に置き換え文字で表現すれば良い。自分の考えや抽象的なイメージをセグメンタルな記号（言語）に変換することは、映像に親しんで成長した世代は苦手だと言われているが、大学教育で避けて通れない学びの基本、つまりアカデミック・ライティングの要諦になる。下書きのレポートは添削をして返却するので、学生は修正して清書を正式に提出する。大半の学生は「レポートは書けば、終わり」と捉えているようであるが、文章表現力は誤記を直したり読み手に意図が的確に伝わるように推敲したりするプロセスにおいてしか向上しないので、学生に適切な表現を考えさせる1対1

の指導が不可欠になる。

「専門演習」は演習活動援助金が適用されるので、コースの終盤に古川美術館を訪れた。経営学部の学生は起業家を夢見ている学生が多いので、名古屋の有名な事業家である古川爲三郎氏の足跡を辿った。年表・当時の写真等の公開資料を通して、古川爲三郎氏はどのように事業に成功したか、成功した事業家はどのように社会に貢献したかを本学の設立を振り返りながら理解し、一般公開されている美術品を鑑賞した⁽⁶⁾。

前期の「専門演習Ⅰ」と同様に、後期に「専門演習Ⅱ」で行った授業の概要を示す。前期授業が図書館（本学のL棟・愛知県図書館・名古屋市鶴舞図書館）の利用に慣れることに主眼を置いたのに対し、後期授業ではテーマに合う本を探すことに焦点を当てた。テーマは、自分の趣味を紹介して演習仲間と親しくなるため、1年半後に社会人として飛び立つので業界研究を兼ねて職業意識を高めるため、今後の長い人生をどう生きるかを考えるため、趣味・職業・人生とした。選んだ本は自宅で読んできて教室で内容を紹介すること、3回ビブリオバトルを行うこと、読んだ本3冊について期末レポートにまとめることの3点は前期と同じである。

経営学部では毎年、専門演習の総括として後期14回目に発表会を開催している⁽⁷⁾。他の演習に属する学生と教員の前で、それぞれの演習で1年間取り組んだことをプレゼンテーションする場となっているので、ビブリオバトルを披露した。

【授業の目的と概要】

卒業論文を執筆する専門演習Ⅲ・Ⅳの前段階として、この授業では「本を読む」ことを楽しみながら親しみます。演習授業では課題図書の輪読が一般的ですが、この授業ではビブリオバトルという形態により、ゼミ生とゼミ生、ゼミ生と知識をつなげます。

【授業計画】

第1回	オリエンテーション	前期評価・後期授業の進め方について説明、個人面談
第2回	本の選択1	趣味に関する本の選択
第3回	ビブリオバトル1-1	Aグループのプレゼンテーション
第4回	ビブリオバトル1-2	Bグループのプレゼンテーション
第5回	本の選択2	職業に関する本の選択
第6回	ビブリオバトル2-1	Aグループのプレゼンテーション
第7回	ビブリオバトル2-2	Bグループのプレゼンテーション
第8回	本の選択3	人生に関する本の選択
第9回	ビブリオバトル3-1	Aグループのプレゼンテーション
第10回	ビブリオバトル3-2	Bグループのプレゼンテーション
第11回	まとめ1	後期学修の振り返り

第12回	レポート提出	レポートの提出→返却→修正
第13回	発表会の準備	発表会のリハーサル
第14回	発表会参加	ビブリオバトル実施
第15回	まとめ2	専門演習Ⅲ・Ⅳに向けて

【授業の到達目標】

良い本に出会って知識が獲得できるようになる。
 聴衆が理解・共感するプレゼンテーションができるようになる。
 プレゼンテーションを傾聴できるようになる。

【事前・事後学習】

図書館で良い本を探して、プレゼンテーションの準備を行うこと。

【成績評価基準】

プレゼンターとして、本の紹介を通して効果的なプレゼンテーションができるか。
 聴衆として、発表を傾聴する責任と姿勢に関心が払えるか。

3.3 ビブリオバトルの状況

ビブリオバトルで学生が前期授業で紹介した本を表1、後期授業で紹介した本を表2に示す。

表1 前期で紹介された本

第1回	男子A	山田悠介『ブレーキ』角川書店2005年
	男子B	東野圭吾『容疑者Xの献身』文春文庫2008年
	男子C	宮部みゆき『レベル7』新潮文庫1993年
	男子D	鎌池和馬『とある魔術の禁書目録』電撃文庫2003年
	男子E	鳥越規央『9回裏無死1塁でバンドはするな』祥伝社2011年
第2回	男子E	渡辺俊介『アンダースロー論』光文社新書2006年
	男子B	佐藤博樹・藤村博之・八代充史『新しい人事労務管理』有斐閣1999年
	男子C	宮本延春『オール1の落ちこぼれ、教師になる』角川文庫2009年
第3回	男子A	木崎伸也『2010年南アフリカW杯があぶない!』角川SSC新書2008年
	男子E	恩田陸『エンド・ゲーム：常野物語』集英社2009年
	男子C	岡嶋裕史『暗証番号はなぜ4桁なのか?：セキュリティを本質から理解する』光文社新書2005年
	男子A	L. ジャフェ、L. サン・マルク『お金とじょうずにつきあう本』晶文社2001年
	男子B	森雅浩『役員給与・退職金の実務ポイント』日本実業出版社2011年

表2 後期に紹介された本

第1回	女子F	D. カーネギー『人を動かす』創元社2016年
	男子D	『ストレス社会を生きる55の方法』 ⁽⁸⁾
	男子A	中村貞文『アフィリエイトで年3000万稼ぐ人の検索キーワードの法則』秀和出版2014年
	男子C	梅原大吾『1日ひとつだけ強くなる：世界一プロ・ゲーマーの勝ち続ける64の流儀』中経出版2015年
第2回	女子F	森下くるみ『すべては「裸になる」から始まって』講談社2008年
	男子A	福澤徹三『自分に適した仕事がないと思ったら読む本：落ちこぼれの就職・転職術』幻冬舎2008年
	男子C	山崎武也『一流の仕事術：仕事を極めるための100の法則』PHP文庫2003年
	男子D	波田浩之『実務入門 図解でわかる広告入門』日本能率協会マネジメントサービス2006年
	男子B	榎本和也『アニメを仕事に！トリガー流アニメ制作進行読本』星海社新書2014年
第3回	男子B	古川琢也『ブラック企業完全対策マニュアル』晋遊舎2013年
	男子C	田口佳史『超訳 老子の言葉：「穏やかに」「したたかに」生きる極意』三笠書房2014年
	男子D	ムーギー キム『最強の生き方：世界中の上司に怒られ、凄すぎる部下・同僚に学んだ77の教訓』東洋経済新報社2016年
	男子A	富坂美織『ハーバード、マッキンゼーで知った一流にみせる仕事術』大和書房2013年

前期は、3年次への進級制限をクリアできなかった学生や2年次の長期欠席が継続し退学に及んだ学生がいたので、ビブリオバトルに参加した学生は5名であった。全員が男子学生である。自己紹介で演習を選んだ理由として「本が好きだから」と言った学生もいれば、逆に「本は好きじゃないから好きになりたいくて」と説明した学生もいた。機械的に振り分けられた学生もいた。

ビブリオバトルで本を紹介する日は、スケジュールを調整して学生に決めさせた。ところが、最後のページまで読めなくて発表日に本を紹介できなかった学生が残念ながらいた⁽⁹⁾。そのような場合は次週必ず行うということを全員で確認し、できないことを投げ出すのではなく挑戦する姿勢を大切にしたい。ビブリオバトルでは本のジャンルは問わないので、ミステリー、野球、実務書等、学生が選んだ本から、それぞれの学生の素顔や置かれている環境が垣間見えるが、いかがだろうか。

後期は女子学生が一人加わり、教室の雰囲気が少し明るくなった。前期に欠席が多かった学生は後期も休みがちであった。その一方で、前期はバラバラに座っていた学生が後期は互いに近い席に座って雑談を楽しむような変化も表れた。

4. 調査

4.1 調査概要

本学では演習は学生による授業評価の対象科目ではないので、翌年の授業改善に繋げるため、後期授業最終日2017年1月27日に無記名によるアンケートを行った（資料参照）。アンケートは選択式の設問（1）（3）（5）（7）（9）（10）と、その理由を内省する自由記述式の設問（2）（4）（6）（8）（11）から成る。アンケートの対象は15回目の授業に出席した学生5名である。

4.2 結果と考察

表3は、2年生終了時と専門演習を1年間受講したアンケート実施時とを比べて、それぞれの項目がどの程度向上したかを示した結果である。選択式回答は平均値を示し、自由記述は不適切な表現が一部分見られるが、そのまま引用する。

表3 授業について

項 目	平均
(1) 調べる力は向上したか	3.6
(3) 分析力は向上したか	2.8
(5) 調べたことをまとめる（発表する・書く）力は向上したか	3.8
(7) 本を読むことに親しめるように（楽しく）なったか	3.4
(9) 授業に満足にしているか	3.8

選択式設問（1）の平均値は3.6である。「調べる力が向上した」と4を選んだ学生は、その理由として「本を読むと気になるキーワードがでてきて、それについて調べるので、自然と調べる力がついたと思う」「本を見る時、どのような内容で話すかなどを考える上で調べる力が身に付くことで内容に厚みができた」「本を自分の為に深く読み込む事がしっかり出来る様になった」と述べている。

選択式設問（3）の平均値は2.8である。「分析力が向上した」と3を選んだ学生は、その理由として「内容が似ているのが多く、分析にならなかった」「もともと分析は苦手だし意識としても変わっていない」と選んだ本の特徴や自分自身を振り返っている。

選択式設問（5）の平均値は3.8である。「調べたことをまとめる（発表する・書く）力が向上した」と3を選んだ学生は、その理由として「今まで本を読んで、文章にしたり、発表したりした経験がなかったので、昔に比べると力はついたと感じる」と手応えを感じている。3より一段階上の4と回答した学生は「本を相手に教えることは難しく、発表することへの考え方は勉強になった」「授業を通して伝えたい部分を上手くまとめることが後につれてできるようになったから」「最後まで読み、そこから短く省略して分かりやすく発表するという工程があったため」「人に説明するとなると、考えをまとめないと話せなかったから」と力がついた理由を自分で考えて

説明している。

選択式設問 (7) の平均値は3.4である。「本に親しめるようになったか」で2を選んだ学生は「授業で本を読む機会があったので少しは本を好きになるだろうと思っていたが、あまり好きになれなかった」と正直に感想を記している。2より一段階上の3を選んだ学生は、その理由として「本を読むことはもともと嫌いじゃない」と読書の習慣がすでにあったという理由であった。その一方で、4と回答した学生の一人は「元々本が好きなのでそれ以上に理由がない」と述べている。理由は同じなので、両者の認識の違いが異なる回答として表れただけのようである。4と回答した他の学生は「大学生活で本を読むことは初めてであり、図書館に至っては何年ぶりか分からなかったが良い機会を得た為」「元々読むのは好きで好きな本を紹介できる機会を得たから」と書いている。

選択式設問 (9) の平均値は3.8である。「授業に満足にしているか」で3を選んだ学生は元々本が好きな学生2名、3より一段階上の4を選んだ学生は本が好きな学生と本に親しんでこなかった学生の各1名、非常に満足していると5を選んだ学生は大学生活で初めて本を読んだ学生であった。シラバスに謳ったように、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」は本を読むことを通して本に親しむことが授業目的であった。本を読むのが好きな学生より、読書習慣がない学生の授業満足度が高いのは自然な結果であり、目的は達成できたと考えられる。

表4は(10) ビブリオバトルについてのアンケートの結果で、選択式なので平均値を掲げる。

表4 ビブリオバトルについて

項目	平均
(10) A. 内容を整理して説得力のある説明ができたか	3.0
B. 聴衆は発表に興味を持ってくれたか	3.4
C. 聴衆に言いたいことが伝わったか	3.4
D. 聴衆に分かりやすいように大きな声でゆっくり説明できたか	3.4
E. 自分の発表に満足したか	3.0
F. ビブリオバトルの経験は役に立つと思うか	4.2

A「説得力のある説明ができたか」とE「発表に満足したか」の平均値は3.0で、ビブリオバトルが初めてなので控えめな自己評価である。B「聴衆は興味を持ってくれたか」とC「言いたいことが伝わったか」とD「大きな声でゆっくり説明できたか」の平均値は3.4で、聴衆に言いたいことを分かりやすく伝えられて興味をもたせることができた達成感を感じているように受け取れる。F「ビブリオバトルの経験は役に立つと思うか」の平均値は4.2と非常に高い評価なので、ビブリオバトルは教育効果があったと考えて良い。

(11)「授業の感想」は、「初めはビブリオバトルをやると聞いて嫌な気持ちだったが、発表を何回もやると案外楽しくなっていた。言いたいことを伝えることは難しいが、自分なりの言葉

で発表することができたと思う」「多くの大学生が縁を失くしている本に触れる機会を少ない授業回数で吸収できる部分は他のスピーチを通して取り入れるべきだと感じた」「本を読むことで新しい知識を得ることができたり、本を他の人に紹介し発表することで自分にも分かりやすくその本に入って理解することができ、相手にも興味を持ってもらえれば自分も紹介して良かったと思えるのでビブリオバトルをして良かったと思いました」「発表することは好きじゃないけど、ビブリオは楽しかった。1つの本を短期間で何度も読み返したのもはじめてだったが、回数をかさねるごとに違うものが見えてきたりして、人に伝えることがなければ、こんなに読みこまないと思った」と綴られていた。

5. ビブリオバトルから今後の課題へ

青春時代は道に迷っているばかりと言われるように、青春真只中の大学3年生は勉強以外の活動、例えば部活動やアルバイトや私生活等で忙しいようで、演習時間に全員が揃うことは難しいと漏れ聞く⁽¹⁰⁾。学生の本分たる勉強より優先しなければならない大切なことなら致し方ないのかもしれないが、演習授業は学生同士、学生と教員が直接議論できる大学本来の学びの場であり、演習を蔑ろにしたら大学が大学でなくなってしまう。

初回オリエンテーションで15回の授業予定を提示し、ビブリオバトル参加が単位取得の必須要件であると説明した⁽¹¹⁾。学生が自主的に学修できるよう図書館の利用体験から始めて、発表準備が不十分な学生は翌週再チャレンジができるなど、個々の学生のペースで前向きに取り組めるよう工夫も凝らした。しかし、学生が全員出席する日は多くなかった。学生の無断欠席が続くと、このままビブリオバトルを続けられるだろうかと思えてくる。そのように感じ始めた頃、学術情報課の富田敦史課長補佐からビブリオバトルを見学したいと申し出があった。

2016年10月21日に富田氏は教室を訪れ、学生が行った発表後のディスカッションに加わった。この日も発表予定者の無断欠席があり、ビブリオバトルが成立するか心配だったが、欠席した学生に代わって別の学生が本を紹介した。その学生は手元に本がなく記憶に基づいての発表であったが、その学生らしさが表れたプレゼンだったと富田氏からコメントがあった。また、もう一人の学生は本から読み取った思いを的確に報告できていて、練習すれば地区の大会に出場できるのではと言われた。手探り状態から始めたビブリオバトルだが、第三者の立場から、まずまずの滑り出しと評価されたようだ。

4年次の卒業研究の前段階として、学生の自主性を尊重しながら、それぞれの学生の関心を引き出すとともに、学生の相互交流を促進する仕掛けとして、3年次の「専門演習」でビブリオバトルを行った。アンケート結果から、学生は授業に対して満足しており、ビブリオバトルの経験は役に立つと肯定的に捉えていることが分かった。よって、授業目的の一つ「ゼミ生と知識」をつなげることは達成された。

年度当初、教室で交流がほとんどなかった学生間の距離が近くなり、指示されなくても欠席者をフォローする行動ができるようになった。よって、授業目的のもう一つ「ゼミ生とゼミ生」

をつなげることも達成されつつあるのではないだろうか。

実にゆっくりであるが、認証評価制度で重視される「学生が『何を学んだか』ではなく『何を身に付け、何ができるようになったか』という観点」において（文部科学省中央教育審議会大学分科会）、目論見は上手く運んでいると判断できよう。これを4年次の「専門演習」で展開していくことが、次なる課題である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、授業見学として教室を訪れ、ビブリオバトルのディスカッションに参加くださった愛知東邦大学学術情報課富田敦史課長補佐にお礼を申し上げます。

注

- (1) 演習には定員が設定されているため、希望しない演習に配属される学生が制度的に生じる。演習選択において管理上の理由による定員を設けず、学生の希望を最優先する大学も少なからずある。学生の学ぶ意欲を育もうとするなら、定員制度は教員の負担平準のためと説明されているが、伊藤（2015：62）が指摘しているように、再考の余地がある。
- (2) プログラム学習（programmed instruction）の観点では「基礎演習」から「総合演習」「専門演習」への系統性は希薄であるが、「専門演習」は3年次から4年次へ継続すると位置づけられている。
- (3) 毎年、経営学部の「基礎演習」は大学祭でポスター発表を行っているが、発表当日の朝ポスターを張っている仲間の隣でスマートフォンから模造紙に急いで書き写している学生が必ずいる。このような状況を改めるには、教員間の指導のバラツキを整えて、発表のルール等の基本事項を全学生が等しく修得する必要がある。そこで、この数年教科書なしで進められてきた「基礎演習」に、2016年度は共通の教科書『大学生のための日本語表現実践ノート 改訂版』の使用を基礎演習担当委員として提案し、採用された。他大学と本学とでは学生や教育環境が異なることもあり市販の教科書を使うことに抵抗のある教員はいるものだが、文部科学省の認証評価制度による実地調査で教科書を提示して学修内容の説明が行われたと報告を受けた。「鉄は熱いうちに打て」と言う。「基礎演習」は、心新たに入学した新生を全担当教員が同じ思いを以て、教員の専門性（関心）より基礎的な教育を実践する場であらねばならない。
- (4) ほとんどの学生が愛知県図書館も名古屋市図書館も利用したことがなかったので、貸出カードを作る手続きをしてから、各階の配架状況を実際に確認した。
- (5) 2015年度にインターネットの記事からの貼り付けによって作成されたと判断される卒業研究が提出されたが、取り下げとなった。
- (6) 帰り道で「初めて美術館で絵を見た」と感想を述べた学生がいた。学外学習は学生間や学生と教員との関係を縮めるだけでなく、間もなく社会に出ようとする学生の教養を高めることにも役立っている。
- (7) 全ての演習が発表することが前提のようだが、諸事情により発表しない演習は司会等の運営を学生が担当することで発表会に参加している。
- (8) アカデミック・ライティングでは引用文献を明記するのが作法なので、これを身に付けさせるため、奥付の書誌情報を出すことを約束事とした。しかし、発表当日に本を所持していない学生がビブリオバトルに参加したため、本の詳細は不明である。本来ならルール違反であるが、ビブリオバトルに参加したい、見学者の要望に応えなければという学生の思いを尊重したものである。
- (9) 2016年度のシラバスを提出した時、学部長は「うちの学生には無理じゃない？」と懐疑的な態度であった。「小学生でもやっていますよ」と応えたものの、暗中模索であった。
- (10) 学生が全員出席しないので、一斉授業ではなく、個別対応しているそうである。

(11) 3年次の学生にわざわざ言うことではないかもしれないが、陳情すれば特別扱い（超法規的な処置）をしてもらえると思っている学生がいるので、規程の遵守を確認した。大学は高等教育機関である。授業の到達目標に達しなければ、勉強して再挑戦すれば良い。その過程で学生は人生において真に必要なことを学ぶ。

参考文献

- 愛知東邦大学（2016）『SYLLABUS 2016 経営学部地域ビジネス学科』
- 伊藤恵美子（2015）「外国人留学生の日本語学習の歩み：入学後2年間を中心に」『東邦学誌』43-62.
- 岡野裕行（2013）「皇學館大学におけるビブリオバトル」ビブリオバトル普及委員会『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会，32-36.
- 谷口忠大（2013）『ビブリオバトル：本を知り人を知る書評ゲーム』文藝春秋
- 中山功一（2013）「学部1年生のプレゼンテーション能力向上にむけた授業への導入」ビブリオバトル普及委員会『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会，37-41.
- ビブリオバトル普及委員会（2015）『ビブリオバトル ハンドブック』子どもの未来社
- 山路奈保子（2013）「日本語教育でビブリオバトル：日本語プレゼンテーション入門として」ビブリオバトル普及委員会『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会，28-31.
- 吉野英知（2013）「ビブリオバトルの成り立ちと発展：History of ビブリオバトル」ビブリオバトル普及委員会『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会，21-26.
- 米田明美・蔵中さやか・山上登志美（2010）『大学生のための日本語表現実践ノート 改訂版』風間書房
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会法科大学院特別委員会「認証評価制度の概要」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/012/gijiroku/06051204/003.htm>
2017年3月25日参照
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会「認証評価制度の充実に向けて（審議まとめ）」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsfiles/afiedfile/2016/03/25/1368868_01.pdf>
2017年3月29日参照

【資料】

授業アンケート：2016年度「専門演習」

今後の授業に役立てるために意見を聞かせてください。2年生の終了時と現在を比べてください。アンケートは無記名式ですから、成績には影響しません。

(1) 調べる力について

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
全然上がらなかった 非常に上がった

(2) それは、どうしてだと思いますか。

(3) 分析力について

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
全然上がらなかった 非常に上がった

(4) それは、どうしてだと思いますか。

(5) 調べたことをまとめる（発表する・書く）力について

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
全然上がらなかった 非常に上がった

(6) それは、どうしてだと思いますか。

(7) 本を読むことの楽しさと親しみについて

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
全然楽しくなく親しめなかった 非常に楽しく親しめた

(8) それは、どうしてだと思いますか。

(9) この授業の満足度について

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
全然満足していない 非常に満足している

(10) ビブリオバトルについて

A. 内容を整理して説得力のある説明ができましたか。

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
そう思わない とても思う

B. 聴衆は、あなたの発表に興味を持ってくれましたか。

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
そう思わない とても思う

C. 聴衆に言いたいことは伝わりましたか。

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
そう思わない とても思う

D. 聴衆に分かりやすいように大きな声でゆっくり説明できましたか。

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
そう思わない とても思う

E. 自分の発表に満足しましたか。

1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5
そう思わない ともそう思う

F. ビブリオバトルの経験は役に立つと思いますか。

1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5
そう思わない ともそう思う

(11) 授業の感想を書いてください。

受理日 平成29年3月31日